

## あとがき

学術情報部次長 近藤 茂生

本『立命館 史資料センター紀要』は『立命館百年史紀要』（立命館百年史編纂委員会発行、一九九三―二〇一三）の後継誌として、二〇一八年に記念すべき第一号を発行した。以降年一回、紀要を発行しており、今年度も無事に『史資料センター紀要第四号』が発行の運びとなった。執筆者をはじめ関係者の皆さんに厚く御礼を申し上げたい。

さて、立命館 史資料センターは二〇一五年一〇月の開設から、はや丸五年が経過した。二〇一五年度は本学の中期計画であるR2020後半期の初年度であり、二〇二〇年度はその最終年度にあたる。史資料センターの五年間すなわちR2020後半期の取り組みを通じて、史資料センターのプレゼンスの向上と今後の展開について、節目の年である本年度紀要の編集後記を通じて簡単に報告しておきたい。

史資料センターの事業は大まかに区分すれば、史資料センターが展開する教育活動および研究活動（＝教育研究事業）と、所蔵資料等の利用者サービスの提供（＝文書館事業）の二つに区分できる。まず教育研究事業では中川家史料の解読および目録化が進み、創立者研究の一環として中川小十郎研究が大きく進展した。その成果は展示企画や紀要への論文発表のほか、共通教育や附属校における自校史教育にも展延している。また二〇二〇年秋には「西園寺公望関係資料デジタルアーカイブ」を公開し、日本近代史研究等の学術利用が

期待される。また同アーカイブは史資料センター所蔵資料として、初めての一般公開資料となった。

その他、学園史資料の調査、研究成果については「立命館あの日あの時」などHPを中心に発信を進めてきた。二〇二〇年春の新型コロナウイルス禍により、本学においても入学式はじめ新歓行事が中止となり授業もオンライン実施を余儀なくされるなか、史資料センターではこれまでの調査・研究成果から「立命館の基礎知識」など新入生向けのコンテンツを選び抜き、「立命館新型コロナウイルス支援サイト」を通じてオンライン発信するなど、新入生の学生生活のスタートアップを支援することができた。

また図書館事業では教育研究、ネットワーク構築、学園広報はじめ事務等の各場面において史資料センター所蔵資料の利活用が進展した。学生・大学院生・教員からは卒業論文や研究発表の素材として、都道府県校友会等からは写真や発行物への掲載依頼、また各部課からは機関決定の根拠資料や審議経過に関する参考調査依頼、周年事業や広報、企画等、学園史資料の貸出依頼等が年々増加してきている。

二〇二一年度は二〇三〇年を見据えた学園中期計画であるR2030の事業開始の年である。そのカギとなるのは立命館の歴史的資産、知的資産である約七万点にもおよび学園史資料のDB化とデジタルアーカイブ構築である。インターネットを通じて史資料に「いつでも」「どこでも」アクセス可能な仕組みを構築することで、これまで目に触れることが無かった様々な資料を発見し利活用が可能になる。これによって学園アイデンティティの涵養、教育・研究成果の創出、学園ネットワークの形成、業務の効率化が見込まれ、ひいては学園のアカウントビリティと価値向上へと繋がっていくことを期待する。

R2030において史資料センターが目指すものはコンテンツデータとデジタル技術を用いた業務の効

率化と新たな価値創造、すなわちDXの推進である。R2030史資料センタービジョン―『私たちは何も  
のか。どこから来てどこへ行くのか。をわかりやすく』―のもと、史資料センターは新たなステージに踏み  
出していく所存である。引き続き、史資料センター事業へのご理解とご協力をお願いしたい。